

空

平成23年12月15日発行

第9巻第6号

通巻第40号

空



2011・12

SORA 40号

鬼の女房

柴田 佐知子

稲雀無敵の数となりけり
子が誇る傷は小さし秋高し
蟻蚶とぶ音と思へりまだ見えず
弟はいつも元気で草の絮
頼られてばかりの神や黍嵐
一位の実急ぐことなき父の日々
満月や鬼には鬼の女房ゐて
先の世の蟻螂の斧隠し持つ
名月や水のごと来る太郎冠者



田のものを田に焼き秋を惜しみけり

銀漢や筆をもて死を賜りぬ

国境はすべてわたつみ石路の花

大白鳥の為に一席設けたる

海のものまだ動きぬる年の市

金目鯛目玉ばかりの頭となりぬ

神々を闇に押しやる越年火

食べてゐる貌は見せざる嫁が君

寒紅引く立ちし噂も華として

船団を雲が押し出すみあれ祭

宗像大社・みあれ祭

海上神幸大波を先立てて

荒灘のいよいよ荒ぶみあれ祭

春 著

小林 朱 夏

大風呂敷

宮 井 知 英

てのひらで太陽隠す日向ぼこ

卵産む鶏の荒息秋暑し

里神楽寶錢箱に凭れ見る

磔刑の姿に蜻蛉動かざる

凧や雌鶏急に蹲る

旧道の出口明るし竹の春

炭焼の男独りの山となる

私の強き性は血筋か萩括る

着ぶくれて世間が狭くなりけり

震災忌大風呂敷は祖母のもの

毛糸編む幾度も丈を確かめて

あやとりの橋の向かうに母の顔

ポインセチア赤極まりて暗くなる

山眠る一枚岩の烽火台

春著の子おちよぼ口して歩きけり

おほかたは眠りて母の日向ぼこ

ボール

あさなが捷

烏瓜

松田明子

山を見て山に見られて秋日和

風音をのみこむばかり蟻地獄

柿紅葉父にはいつも母が居て

山のもの山に供へて盆用意

両腕に生徒引きつれ稲の花

一の宮のとさか重たき羽抜鶏

蹴りあぐるボールに冬の空があり

烏瓜崖の真下に人住めり

白菜の胴丸々とほめらるる

跡形もなき渡船場や秋の潮

雪割りてやうやく進む渡し舟

ぎんなんの散るだけ散つて文殊堂

垂直に岬は冬の海に立つ

海見えて幟はためく秋祭

白鳥に旅の汚れのありにけり

無住寺を訪ふ人のあり鴟日和

みあれ祭

大地真理

背高泡立草

苑実耶

島裾を隠す船団みあれ祭

電柱を恃みて高し葛の花

新米を高く盛りたるみあれ祭

膝痛む父に手を貸す菊日和

狩衣の男の子逞しみあれ祭

塀越しの会話に背高泡立草

船影が船を消しゆくみあれ祭

秋夕焼荷台に乗せる子と農具

漆喰の壁落ちはじめ吊し柿

夫が寝てそれからの夜の長さかな

蠅螂の腹部ふつくら枯れ遠し

生国を背に飛び立ちし小鳥かな

諸九尼生家

裾野へと湧き出づる霧なだれ落つ

文のみに無事を問ひけり雁渡し

出来立ての飴切る音の澄みにけり

筑後路や旧家に稲田迫りけり

空作品抄
柴田佐知子抽出

月光に攫はれてゐる村ひとつ

高倉和子

灯りても宿場は暗し花八ツ手

中田みなみ

城址は巨石だまりや木の実落つ

荒井千佐代

悩み事聞く冬瓜の後頭部

服部早苗

諸九尼の生家杜なす秋の蟬

柴田志津子

突つ掛けでどこへでも行く神の留守

だいじみどり

風下へ花をすぼめて秋ざくら

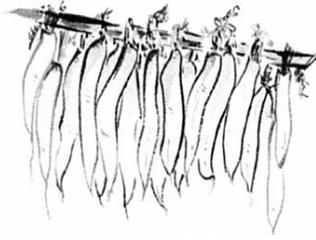
鳳 蛮 華

衰へぬ口が頼りや花八つ手

高倉恵美子

寒鰯を斜めに入る勝手口

秋 千 晴



秋灯下眺めて遠きものばかり

炭焼の男独りの山となる

震災忌大風呂敷は祖母のもの

山を見て山に見られて秋日和

鳥瓜崖の真下に人住めり

島裾を隠す船団みあれ祭

堀越しの会話に背高泡立草

物干しの立方体や天の川

満月やいつそ獣になりて野へ

名月のとどまつてゐる葬の家

天高し夫にも弁当置いて行く

水を得て背筋を伸ばす菊人形

伊勢海老の背筋真直ぐに御節盛る

安武 晨子

小林 朱夏

宮井 知英

あさなが 捷

松田 明子

大地 真理

苑 実耶

鳳 蛮華

栗原 京子

吉田 菫

桜三 奈子

矢野 百合子

秋 千晴

七五三右往左往の鳩の群

曼珠沙華茎に微塵も歪みなし

手の平にそれぞれの水涼み舟

鳴りつづく風鈴外す頃合ひか

牛の鼻たたいて帰る花すすき

きちかうの畏き紺の薈かな

斜交ひの棒を頼りに稲架を組む

吊橋は天空にあり草雲雀

紅玉の齒に沁み故郷誰もゐず

紅葉照り省略かぎりなき城址

蛾になりて黄泉のあなたに逢ひにゆく

眼前の枝まづ払ひ松手入

晩秋やガードの下にジャズ流れ

小林朱夏

宮井知英

湯村 栞

山内 碧

柴田志津子

田岡千章

松田明子

白水良子

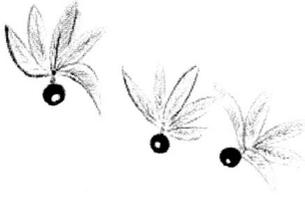
古川夏子

安武晨子

長 節 子

織田高暢

山田正子



荒々と川を叩きて鮭遡上

忘れゆく母をなだめて春の月

黒鹿毛のまつげ涼しく草を食む

おにぎりと本一冊の秋日和

潮ふぶき浴ぶる碑石露の花

母屋への廊下の長しちちろ鳴く

起重機を焼べビルを焼べ秋夕焼

山姥に新走かと問うて見る

粧へる山の名を問ふひとつづつ

柿熟るる隣家やさしき昭和顔

スケートの風巻き込んで飛び上がる

一步二歩三步目辺り秋の声

バス降りる一步に蝗とびつきぬ

遠山のり子

亀井紀子

今井春生

仲里奈央

大地真理

苑実耶

原友子

池田華甲

野畑さゆり

乾有杏

あさなが捷

犬丸勝子

石川叔子



夕焼のガラスのビルに入る人

三の西明治の音で時計鳴る

紫苑咲くその名をつけし学生寮

柿穫れば賑はひ失せてしまひけり

紅葉を天に献ずる山ばかり

縁側の下に矮鶏小屋寒卵

困や眠れば母子なほも似て

何磨くでもなく木賊刈りにけり

木曾へ行く道一筋に男郎花

平家の船匿せし島の若菜摘む

秋高し一人すすむる庭造り

冬あたたか歩むに手摺・杖・柱

青木朋子

清水量子

小川 涼

田代貞枝

片田きく

岸 千手

白木原裕毅

ふじの茜

中原俊之

柳内真梨子

内藤玲二

神谷耕輔

空作品評

柴田佐知子

城址は巨石だまりや木の実落つ 荒井千佐代
紅葉照り省略かぎりなき城址 安武 晨子

一句目、私は佐賀県唐津市の名護屋城跡が浮かんだ。豊臣秀吉の文祿・慶長の役に際し築かれ、七年の間大陸侵攻の拠点となったが、今は往時の壮大な姿を伝える石垣が残るのみである。天守跡などは、石組みが崩れ、まさに「巨石だまり」である。うまい言葉遣いだ。短い言葉で大景が捉えられている。

二句目、かつては幾層もの屋根を重ねた城閣があったのであろうが、時がその姿を変えていったのである。「省略かぎりなき」という思いがけない措辞が時の流れを捉えて見事だ。

風下へ花をすぼめて秋ざくら 鳳 蛮華
物干しの立方体や天の川 //

一句目、コスモスはなかなかにしたたかな花である。強い風もしなやかにやり過ごし、また立ち上がってくる。一重咲のコスモスであろう。吹かれている花の姿がまことに正確に描写されている。

二句目。一階の屋根の上に設けられた物干し場という生活感に満ちた場所が、幻想的な詩空間に変貌していることに驚く。「立方体」が不思議な効果をあげ、物干し場が天の川へ差し出されたかのように美しい。

寒鰯を斜めに入る勝手口 秋 千晴

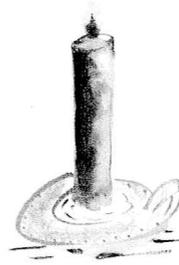
私も最近大きな寒鰯を一本購入して何とか捌いた。発泡スチロールの箱を玄関から入れたが、その大きさと重さで苦労した。千晴さんは勝手口からだが、大変だっただろう。「斜めに入る」によって、寒鰯の大きさが読み手に実感として伝わる。

島裾を隠す船団みあれ祭 大地 真理

十月一日に開催される宗像大社の「みあれ祭」。玄界灘の女神の御座船に、七浦の漁船が幟や大漁旗をはためかして付き従う。掲句は三女神の一人が祀られる大島を出発した時の景であろう。「島裾を隠す」によって船団の数が知れる。以前は五百隻以上の船団であったが、次第に少なくなっているようだ。多くの方に詠んでいただきたい勇壮な玄海の神事である。

空集

柴田佐知子選



外堀の紅蓮激しく開く音
福岡 栗原 京子

ぼろぼろの机に秋の詩は生まる
満月やいつそ獣になりて野へ

犬連れてひとりで話す花野かな

みあれ祭満艦飾の船が来る

浜木綿や漁師の町の女神輿

曲がるとき雪駄の揃ふ秋祭
粕屋 吉田 葦

名月のとどまつてゐる葬の家

鹿の声女院は紅を捨て給ふ

祭馬止まるスクランブル交差点

鯖雲や四男は特攻兵といふ

母親に男の子は優し芋名月

飛石に尾を乗せてをり穴惑
福岡 桜 三奈子

里山の猪垣家の近くまで

天高し夫にも弁当置いて行く

鱒雲過疎の小川の音高し

朝顔や飲むたび曇る牛乳瓶

欄干の蟋蟀川面へ跳ねにけり

物干しの立方体や天の川

交差して張る纜や秋澄めり

母校より講演依頼からすうり

百舌の声墓守として馴染みけり

長崎 鳳 蛮華